闇夜も異世界から来るそうですよ？

R0

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球の滅亡を防ぐため、命がけの特攻を行った輝夜。死ぬ直前に彼の背後に１通の手紙が現れた。

この作品は『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　～光と闇の奇跡～』

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１１７３８４／

の続きです。

息抜き程度に書いてますので、投稿頻度は遅いし、長続きしないかもしれませんが、温かい目で見てください。

作者の知識は二次創作で読んだものとアニメをチラッと見た程度のものです。

目次

異世界召喚直前 ―― 1
問題児たちとの邂逅 ―― 5
箱庭の説明 ―― 10
闇夜、箱庭へ ―― 18
ノーネーム ―― 24

異世界召喚直前

とある岩山でできた孤島に多くの男女がいた。その孤島には激しい戦闘の跡が残っており、彼らにも幾多の汚れや傷があった。その中で1、2を争う程の怪我を負っている青年が上空の空全体を覆いかねない程の巨大な隕石から視線をずらし、自分と同じように酷い怪我を負っている少年に話しかけた。

「沢田綱吉」

青年、光城輝夜に呼ばれた少年、沢田綱吉もといツナは輝夜の言葉に嫌な予感をしながらも耳を傾けた。

「頼みがあるんだが、明聖をお前に任せてもいいか？」

「え!?ちょっと、お兄ちゃん!!どういうことなの!?」

輝夜の言葉に彼の妹の光城明聖は詰め寄った。今、この地球では〝神々サイキョウ（最強・最恐・最凶）の邪神〟と呼ばれる邪神、ロヴィーノの謀略により滅亡の危機に陥っていた。その手段が巨大な隕石を地球に落とすというものだった。しかも、その隕石には特殊な炎を纏わせており、破壊するのも困難な状況だった。そんな中、輝夜から自分に策があると言った。そして、その次に言った言葉が先程のものだった。

「まさか……輝夜。お前、死ぬ気なのか？」

輝夜の言葉の意味を理解したツナが輝夜に尋ねた。それに対して、輝夜は無言の肯定をした。それを聞き、ツナや明聖は猛烈に反対した。しかし、輝夜の覚悟は本物であり、決して揺るがなかった。

「俺は、明聖がいるこの地球を滅ぼしたくないんだ!!」

『ッ!?』

基本、他のことには興味を持たない輝夜が全力で戦う唯一の理由、それは明聖だった。輝夜は明聖を守るためなら、どんな手段も使う。矛盾しているが、その代償で多くの犠牲や世界が滅ぶことになっても、別に構わないと本気で思っている。それが、明聖の望むことではなくて、独り善がりの行動だったとわかっていてもだ。そして、今、輝夜は自分の命を代償に地球を、いや、明聖を守ろうとしているのだ。

「……明聖」

「!?」
　すると輝夜は茫然自失になっていた明聖に近づいて、しゃがみ込み、抱きしめた。
「明聖。俺はお前を泣かせてばかりのダメ兄貴だ。だけど、そんな俺でもお前にはっきりと言えることがある」
　そう言うと、輝夜は優しく、微笑んで、静かに囁いた。
「俺はお前のことを愛している。初めて、会ったあの日から」
「!?お兄ちゃん……」
　そう言われて、茫然自失だった明聖は正気に戻って、明聖の目から涙が流れた。そして、明聖も輝夜に抱きついた。
「酷いよ……。いつも、いつも、大事なことには私を置いていって……」
「……あぁ」
「私……ずっと、……そんなの……嫌だったのよ……」
「……あぁ」
「ずっと、ずっと、……悲しかったのよ……」
「……あぁ」
「それなのに、そんなこと言われたら、嫌いになれないよ……」
「……」
「私も大好きだよ……、お兄ちゃん……」
「……あぁ」
　明聖が話し掛けて、輝夜は相槌をうった。
「どうしても、いっちゃうの？」
「あぁ、これをできるのはもう俺だけだからな」
「お兄ちゃんって、頑固だからね……。……でも、悔しいよ……。私はオリジナルの光の炎を持っているのに……。何もできないなんて……!!」
「……」
「がんばって……」
「あぁ……」
　輝夜と明聖の話し合いが終わると、２人は離れて、輝夜は立ち上が

り、明聖に背を向けた。
「輝夜……」
まだ、納得のできない、ツナが言葉をかけようとしたが、ツナの家庭教師（カテキョー）であるリボーンが止めた。
「諦めろ、ツナ。こいつの覚悟は固い。明聖で止められなかったなら、俺らには無理だぞ」
「でも!!!」
どうしても、諦めきれないツナに輝夜が声をかけた。
「1度、お前を殺した男によく気にかけてくれるな」
「そんなことは関係ないよ!!!輝夜!!!お前が死んだら――――!!!」
「そんなお前なら明聖を任せられる。俺はそう思ったんだ」
「……えっ？」
輝夜の言葉にツナは間抜けな声が出た。
「お前を殺した俺をお前は気にかけてくれている。そんな器のでかいお前なら、明聖を守ってくれる」
「そんな!!!俺はダメツナだし……」
輝夜がいきなり安心しきっている顔でそう言われて、ツナは輝夜を説得することも忘れて自分を卑下するようなことを言い始めた。
「お前は自分のことを過小評価しすぎだ。お前はマフィアのボスになりたくないみたいだが、お前ならこの腐った世界をいい方向に変えられる。俺は本気でそう思っている」
「輝夜……」
輝夜の言葉にツナは何も言えなかった。そして、ツナも説得を諦めたのだった。
「ドレイク!!」
輝夜は匣から自分の相棒の〝漆黒ドラゴン（ドラゴーネ・ネーロ・コルヴィーノ）〟のドレイクを呼び出し、隕石を破壊するための爆弾として、満身創痍ながらも体内に膨大な炎を残しているロヴィーノを掴み、ドレイクに乗って、隕石に突っ込んだ。
輝夜は自分の武器である巨大なガンブレードに光と闇の炎を融合してできた純白の炎を纏わせた。

そして、隕石に近づくと、輝夜の頭の中で様々な走馬灯が流れた。そして、過去を振り替えるのを終えると、輝夜はガンブレードをロヴィーノごと隕石に突き立てた。

「(父さん……、母さん……。今、そっちに行くよ……)

〝龍王(コルナ・ディ・レ・ドラゴーネ)の角(インフィニート・ミラクロ)光と闇の奇跡〟!!!」

輝夜の技により、ロヴィーノの炎が暴走し暴発が起き、その誘爆により隕石は大爆発した。そして、輝夜とドレイクはその爆発による爆炎に巻き込まれた。

……かと思われたが輝夜たちが爆炎に巻き込まれる前にどこから出てきたのか、『光城輝夜殿』と書かれていたが現れた。輝夜たちは気がついておらず、すると、勝手にその手紙が開き、いきなり光り出して、その光は輝夜たちを爆炎よりも早く包み込んだ。

そして、その場には3つのリングだけ残して、輝夜たちはその場から消えた。

問題児たちとの邂逅

「……うっ……んっ……？」

ロヴィーノの爆発に巻き込まれた筈の輝夜が目を覚ますとそこは、なぜか、上空４０００メートルにいて、そこから落下していた。

（ここはどこだ……？あの世か…？）

輝夜は自分は死んだはずだと思っていたため、思わずそんなことを考えていた。ちらりと周囲を見回すと3人の少年少女と1匹の猫も一緒に落ちていた。

（……チッ。リングが無え……）

下には湖が見えたが、上空４０００メートルからの落下だとそんなものは無意味なため、この状況を何とかしようと〝闇夜〟の炎を使おうと思っていたが輝夜の右手の指にはさっきまではめていた筈のリングが無かった。爆発に巻き込まれて壊れたのかと考えたが、それよりも今の状況を何とかしようと予備のリングを取り出そうとした。そこで輝夜はふと気がついた。

（……何かの膜が張られているな）

落ちている途中で水膜が何重にも張られていたのだ。これが緩衝材の役割を果たしているみたいだ。

「……」

そのことを理解すると、輝夜は何もしなくても大丈夫かと思い、懐に伸ばしていた手を引っ込めた。そして、輝夜たちはそのまま、湖へと落下した。

「……」

水を吸って重くなった服を引きずりながら、輝夜は黙々と湖から上がった。そこでふと目を向けると一緒に落ちていた少年少女たちが話していた。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引きずり込んだあげく、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」
「……いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」
「いや、俺は問題ない」
「まあ、それなら俺も大丈夫だな」
「そう。随分ずいぶん身勝手ね」
　炎をモチーフにしたヘッドホンをつけた少年と気の強そうな少女がそう話しており、側には物静かそうな少女が三毛猫を抱きかかえて、じっとしていた。
「まず間違いないだろうけど、一応確認しておくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」
（手紙……？）
　少年の言葉に輝夜は内心、首を傾げた。輝夜は手紙について、全く知らなかったのだ。そもそも、仮に届いていたとしてもあんな戦いの最中で読む暇など当然、無かったのだ。そんな輝夜の心情とは余所で話は進んでいた。
「そうだけど、まずはその『オマエ』って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後気を付けて。それで、そこの猫を抱きかかえている貴女は？」
「春日部耀。以下同文」
「そう。よろしく春日部さん。ところで、野蛮で凶暴そうなそこの貴方は？」
「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜さかまきいざよいです。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と容量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」
「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」
「ハハ、マジかよ。今度作っとくから覚悟しとけ、お嬢様。それで、そこでずっと黙っているあんたは何もんだ？」
　そこで、少年、十六夜が輝夜に尋ねてきた。飛鳥と耀も輝夜のほうを見ていた。それに気がついた輝夜はいったん、考え事を止めて、自

分の名を名乗った。
「光城輝夜だ」
そう言って、輝夜は再び考え事を始めた。

（うわぁ……なんか問題児ばっかりみたいですねぇ……）
そんな様子をウサ耳のついた少女、黒ウサギが茂みに隠れて、こっそりと見ていた。召喚しておいてあれたが……彼等が協力する姿は客観的に想像できない。黒ウサギは陰鬱そうに重く溜息を吐くのだった。
「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」
「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」
「……。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」
（箱庭……。例の手紙とかに書いていたのか？……ここはあの世じゃないのか？だが、確かにこいつらからは自分が死んだという素振りを見せてないな。こいつらが自覚無いのか。それとも、俺が生き延びた？あの状況だとそんな可能性は無い筈だが……）
輝夜は十六夜たちの会話を聞きながら、輝夜は今の状況について、考えていた。しかし、どう考えても確信を得られなかったため、仕方ないと思い、ため息をつきながら、ある茂みのほうに視線を向けた。すると、それと同時に十六夜が声を上げた。
「仕方がねぇな。こうなったら、そこに隠れてある奴にでも聞くか？」
その途端、茂みからザザッと葉が擦れる音が漏れた。四人の視線が茂みに集まる。
「なんだ、貴方も気付いてたの？」
「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの２人も気付いていたんだろ？」
「風上に立たれたら嫌でも分かる」

「……あんなの隠れているとは言わん」
「……へぇ？面白いなお前達」
　そう言って、十六夜は興味深そうに耀と輝夜を見ていた。だが、すぐに自分たちを呼び出したであろうものいる茂みのほうに視線を向けた。
「や、やだなあ御四名様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」
「断る」
「却下」
「お断りします」
「こっちはその脆弱な心臓だったらショック死しそうな目にあってんだ。それで穏便に済ませようとかどれだけ面の皮が厚いんだ？自称、脆弱な心臓の阿呆ウサギ」
「あっは、取り付く島もない……って最後の方！真顔で正論ととんでもない暴言を吐かないでくださいませ！」
　両手を上げ、降参のポーズをとりながら黒ウサギは、四人を値踏みしていた。（最後の輝夜の発言に対して、思わずツッコんだが）
（肝っ玉は及第点。この状況でノーと言える勝ち気は買いです。まあ、扱いにくいのが難点ですね）
　そう考えていた黒ウサギだが、１つ間違いがあった。それは、この４人、特に輝夜を自分が扱える人物だと思っていることだ。現に今、黒ウサギが自分たちを値踏みしていることを輝夜は気がついているが、逆に輝夜が黒ウサギのことを値踏みしていることに黒ウサギは気がついていないのだ。
　すると、そんな黒ウサギの背後に耀が回り込んで……
「えい」
「ふぎゃ!?」
　黒ウサギの耳を根元から掴んで引っ張ったのだ。
「ちょ、ちょっとお待ちを！この雰囲気で、しかも触るまでなら黙って

受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?」
「好奇心のなせる業」
「自由にも程があります!」
「へぇ?このウサ耳って本物なのか?」
　すると、今度は十六夜が右から掴んでかかる。
「……。じゃあ私も」
「ちょ、ちょっと待っ!そこの殿方!どうか、助けてください!!」
　飛鳥までもが黒ウサギの耳を掴んできたので、黒ウサギは最後の希望だと言わんばかりに輝夜に助けを求めた。
「はぁ……」
　輝夜はめんどくさいと言わんばかりにため息をついて、黒ウサギたちに背を向けたのだ。
「ちょ、ちょっと!どこに行くのですか!?む、無視しないでくださ……ふぎゃあぁぁーーーー!?」
　そんな輝夜を見て、黒ウサギは慌てて呼び止めようとしたが叶わず、湖付近で黒ウサギの悲鳴が鳴り響いたのであった。

箱庭の説明

「ゼェ、ゼェ……あ、有り得ないのですよ。まさか話を聞いてもらう為に３０分も消費してしまうとは……。が、学級崩壊とはこの様な状況に違いないのデス……」
「いいからさっさと話せ」
　黒ウサギが四つん這いになりながら、荒い息をついているところで十六夜の容赦のない一言を浴びせられていた。
　あの後、３０分経ったところで輝夜が十六夜たちを止めに入ったのだ。ちなみにその３０分間輝夜は１人で静かにじっくりとこの世界について状況判断していたのだ。また、自分の所持品も確認していた。結果、持っていたものは自分の武器のガンブレードの入っている保存用匣、ドレイクの匣、それから予備のＡランクの闇夜のリングだった。
　そして、それらを終えると、いい加減、黒ウサギから話を聞こうと振り向いたがまだ、黒ウサギの耳で遊ばれていたため、まだ続いていたのかと呆れながら、輝夜は止めに入ったのだ。
「そこのあなたはなぜ、すぐに止めてくれなかったのですか!?」
　すると、黒ウサギが輝夜を非難するような目を向けていた。自分が助けを求めた際は無視したくせに、時間経ってから来るのなら、最初から助けてくれたらいいのにと思っていたのだ。
「はぁ？別にいいだろ。高度四千メートルからのスカイダイビングを無理矢理させられたんだ。はっきり言って、トラウマものだろ。そんな荒んだ精神を和ませるために俺は1人で静かにいる時間、こいつらはお前の耳が必要だったってだけの話だ。責任者ならそれぐらい、多目に見ろ」
「そうだぜ。俺たちは死ぬかと思ったんだ。グスッ（棒）」
「ええ、何て恐ろしかったのかしら。グスッ（棒）」
「怖かった。グスッ（棒）」
「うっ……」
　黒ウサギは『なんて、わかりやすい嘘なんですか!』や『そこにい

る人たちはただ便乗しているだけでしょ!?嘘泣きや棒読みがバレバレですよ！』と思ったが輝夜の言い分は客観的に見れば一理あったので、罪悪感も感じたため、これ以上何も言うことができなかった。そこで黒ウサギは気を取り直して咳払いをして、話し始めた。

「それではいいですか、御４人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！「くどい。とっとと、言え」黙ってください!!コホンッ。ようこそ、〝箱庭の世界〟へ！我々は御４人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚しました！」

「ギフトゲーム？」

「ＹＥＳ！すでにお気づきかもしれませんが、御４人方は普通の人間とは違う特異な能力を持っています。それは、様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられたギフト、恩恵なのでございます。皆様は、その恩恵を駆使して競い合うギフトゲームに参加する資格をお持ちなのです！この箱庭は、強力なギフトを所持した者たちが面白おかしく生活できるためのステージなのです！」

「……」

黒ウサギの言葉に輝夜は考えた。黒ウサギの言う『普通の人間とは違う特異な能力』について、見当もつかなかったのだ。一応、心当たりはあった。それは自分の使える死ぬ気の炎、闇夜の炎だった。しかし、これは死ぬ気の炎の１つであるため、恩恵と呼ばれる程のものじゃないと思ったのだ。輝夜がそう考えているうちに話が続いていった。

「まず初歩的な質問からしていい？貴女の言う〝我々〟とは貴女を含めた誰かなの？」

「ＹＥＳ！異世界に呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多ある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「断る」

「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの〝主催者（ホスト）〟が提示した商品をゲットできるというシンプルな構造に

なっております」
「……〝主催者〟って誰？」
「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試す為の試練を称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示する為に独自開催するグループもあります。」
「結構俗物ね。……チップには何を？」
「それも様々ですね。金品、土地、利権、名誉、人間……そしてギフトを賭けあう事も可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むこともできるでしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然――ご自身の才能を失われるのであしからず」
「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」
「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期間内に登録していただけたらＯＫ！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったら参加していってくださいな」
「……つまり『ギフトゲーム』はこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」
　飛鳥の言葉に黒ウサギが感心したように答えた。

「ふふん？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。『ギフトゲーム』の本質は一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。」
「そう。中々野蛮ね」
「ごもっとも。しかし主催者は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めてからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」
　そこで黒ウサギは一度流れを区切ってこう続けた
「話した所で分からないことも多いでしょうから、ここで黒ウサギと一つゲームをしませんか？」
　そう言うと黒ウサギは虚空に向かって指を鳴らすと何処からともなくカジノにありそうな木製緑の布が貼られたテーブルが落ちてきた。そして、これはまた、どこからともなく、取り出したトランプを

見せながら、黒ウサギは説明した。
ギフトゲーム　〝スカウティング〟
・プレイヤー　光城　輝夜
逆廻　十六夜
久遠　飛鳥
春日部　耀
・クリア条件　テーブルに並べられたカードの中から絵札のカードを選ぶ。
・クリア方法　選べるカードはプレイヤーにつき1枚のみ。
・敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。
宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗と、ホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。
〝サウザンドアイズ〟
「商品は、そうですねぇ……黒ウサギに何でも一つ命令できるということにしましょうか♪」
「ほう?……何でも、ねぇ……」
そう言って十六夜は黒ウサギの豊かに育った双丘を眺め
「勿論性的なことはダメですヨ!?」
その視線に気がついた黒ウサギが自身のそれを庇うように腕を回した。
「冗談だ」
十六夜は笑いながらそう言うが、もはや冷たくなった女性陣の目が十六夜に対する印象を表していた。
「……今の話の流れから察するにできる範囲で何でもか?」
そこでずっと黙っていた輝夜が尋ねた。
「え?……え、えぇ。黒ウサギも実現不可能なお願いはさすがに……」
「そうか……」
それを聞いて、輝夜は黙ってしまった。輝夜の質問に周りは訝しげに見ていたが輝夜は無視した。そんな輝夜を尻目に飛鳥が尋ねた。
「チップには、……貴女の言うギフトを賭けないといけないのかし

ら？」
　それを聞いた黒ウサギはどこか、人を喰ったような笑みを浮かべて答えた。
「最初のギフトゲームということでチップはなしとさせていただきます。強いて言うなら皆さんのプライドを掛けるといった所ですか。この程度のゲームで負けてしまうのでは、困るのです。ええ、まったく本当に困るのです。むしろお荷物・邪魔者・足手まといなのです！」
　そう言う、黒ウサギだが、内心、冷や汗ダラダラだった。今の挑発で輝夜たちの機嫌が損なわれないのかと。現に十六夜、飛鳥、耀の３人は目付きを少し鋭くした。しかし、輝夜だけは表情を変えていなかった。それが余計に黒ウサギを不安にさせたのだが、とりあえずゲームをすることにした。
　さっそく、カードを並べようとしたが、十六夜がカードのチェックを申し出て、それに黒ウサギは了承した。そして、十六夜、飛鳥、耀の３人は念入りにカードをチェックし始めた。しかし、輝夜はそんな３人を少し離れたところで見ていた。
（このゲーム、イカサマし放題だな）
　輝夜はなんとなく、そう思っていた。現に飛鳥と耀がカードに何か細工をしていた。しかし、十六夜だけは何か細工している様子は無かったが、何をしているのか輝夜には見当がついていた。そして、そんな何もしない輝夜に十六夜たちは訝しげに見ていたが、結局、話しかけることもせず、ゲームが始まった。
　そして、１番手は十六夜だった。十六夜はざっとテーブル上に並べられたカードを見ながら、黒ウサギに言った。

「さっきは粋な挑発をありがとよ」
「き、気に入っていただけて何よりデス……」
　十六夜の皮肉に内心ビビっているのか黒ウサギは、若干引き攣りながらも言葉を返す。
「これはその礼だ!!」
　十六夜が突如テーブルを平手で叩きつけた。すると、今の衝撃によ

り周りのカードが空中に舞った。舞ったカードを輝夜はなんとなく眺めていた。
「それじゃ、私はこれを」
「私はこれ」
　黒ウサギが驚いている間に飛鳥と耀がテーブルに落ちた表になった絵札のカードを取った。
「エエッ!?な、何をやっているんですか!?」
「1人1回、絵札のカードを選びとる。ルールには抵触していない筈だろ？」
　驚く黒ウサギを余所に十六夜はしれっと自身の正当性を主張する
　すぐさま黒ウサギはウサ耳を立ててどこかと連絡を取った。
「うう、箱庭の中枢から正当であるとの判断が下されました。し、しかし、十六夜さんと輝夜さんがまだですよ!!」
　正当性を認められ黒ウサギはウサ耳ごと項垂れていたが、ムキになって十六夜と輝夜にそう言った。運が良いのか悪いのか、テーブル上には表になっている絵札のカードはなかった。飛鳥と耀が取った2枚以外全て裏になったみたいだ。
「俺を誰だと思っているんだ？ほらよ」
　などとふてぶてしく言いながら十六夜は手に持つカードを返し、ちゃっかりとクラブのキングを引いていた。それを見て黒ウサギは目を丸くする。
「一体どうやって!?」
「憶えた」
「は？」
（やはりな…）
「だから53枚のカードの並びを憶えたんだよ。」
　何でも無さそうに言った十六夜に、黒ウサギは戦慄しているが、対して十六夜は、既にニヤニヤとした表情で輝夜を見ていた。
「さあ、お前の番だぜ？」
「……」
　十六夜に言われて、輝夜はテーブルの前に黙って移動した。それか

ら、ざっとテーブル上にばらまかれたカードを見て、すぐに特に迷いもせずに、1枚のカードをめくった。そのカードは……

「……え？」

「「……」」

スペードのエースだった。つまり、輝夜の敗北だった。

周囲に走った衝撃はある意味十六夜よりも強かったと言ってもいい。

何故かと言われれば期待していたからとしか言い様がないがその期待のレベルが普通とは違ったのだ。

黒ウサギは人類の中でも最高レベルのギフト所持者が召喚されるという事前知識があったが故のある一種の偏見があったし、十六夜や飛鳥達にしたって未だに力の一端を見せずただ後ろに控えて立っていただけの輝夜に素振りこそは見せないものの興味を持っていたのだ。

しかし、それが手酷く裏切られたのだ。

「これで俺のプライドはズタボロになったわけだが。それで？さっきの話だと、こんなゲームに勝てない俺はお荷物だからいらないって訳か？」

めくったカードを適当に片手でヒラヒラさせながら弄んでいた輝夜は何でも無さそうに黒ウサギに尋ねた。

「い、いえ!!さすがに右も左もわからないお方を放り出す真似はしないのです!!」

「そっか」

慌ててそう言った黒ウサギに対して、素っ気なく返した。

そんな輝夜の態度に明らかに4人は納得がいってないって、顔をしていた。黒ウサギは期待していたのか、1番困惑していて、十六夜は不審そうに見ていて、飛鳥と耀は十六夜よりも冷たい視線を輝夜に送っていた。

「お前、何か隠してんだろ？」

そこで十六夜が輝夜に尋ねた。

「そう思いたければ、勝手にそう思ったらどうなんだ？別に肯定も否

定もしねぇよ」
しかし、それに対しても輝夜は素っ気なく返した。
周りには気まずい空気が流れていた。そんな空気を払拭しようと黒ウサギが声を上げた。
「まぁ、輝夜さんは失敗してしまわれたので今回はなし……ということになりますが他のお三方はお願いがありましたらこの黒ウサギが全力で持って叶えさせてもらいますですよ！」
あくまでも性的な事以外とできる範囲でと付け足したのは場を和ませるためなのか、それとも意外とマジな視線で十六夜を見ているあたり本気で警戒しているのか。
そんな視線を向けられた十六夜は輝夜に対して考えるのはやめて、黒ウサギに挑発的な笑みを浮かべて言った。
「黒ウサギ。俺が聞きたいのはただ一つ。この世界は面白いか？」
そう聞かれて黒ウサギは、花開く様に笑みを浮かべ、こう答える。
「Ｙｅｓ。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白い、と黒ウサギは保証いたします♪」
そして、一同は黒ウサギのコミュニティに向かうことになったが、誰も気がついていなかった。
輝夜が黒ウサギに対して冷たい視線を向けていることに。

闇夜、箱庭へ

「ジン坊ちゃーん！新しい方を連れてきましたよー！」
　しばらく天幕に向かって森の中を進んでいると、箱庭の外壁と内側を繋ぐ入口に辿り着いた。そこにはジンと呼ばれる１０歳前後の少年が佇んでいた。
「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性２人と男性１人が？」
「ＹＥＳ！こちらの皆様が……」
　そう言って振り返った黒ウサギは固まった。その場には飛鳥と耀、それから輝夜しかおらず、十六夜の姿が見当たらなかった。
「あ、あれ？　もう一人いませんでしたっけ？　何か〝俺問題児！〟ってオーラを放っている殿方が……」
「ああ、十六夜君の事？　彼なら〝ちょっと世界の果てを見てくるぜ！〟とか言って駆け出して行ったわよ？」
　あっちの方に、と指をさすのは上空から見えた断崖絶壁。呆然となった黒ウサギはウサミミを荒ぶらせてに問いただした。
「何で止めてくれなかったんですか！」
「止めてくれるなよ、と言われたもの」
「どうして黒ウサギに知らせてくれなかったんですか！」
「黒ウサギには言うなよ、と言われたから」
「う、嘘です！　絶対嘘です！　実は面倒臭かっただけでしょう！」
「「うん」」
「ｏｈ……」
　２人の言葉に黒ウサギは項垂れてしまった。そして、顔を上げて、輝夜のほうを向いた。
「て、輝夜さんもです！何で一言も声を掛けてくれなかったんですか!?」
「どうでもよかったからな」
「ｏｈ……」
　輝夜の言葉に黒ウサギは再び項垂れてしまった。しかし、そこに輝夜はそれに追い討ちをかけた。

「ってか、あのガキを呼び出したのは、お前だろう？ならば、責任を持って、お前が面倒を見ればいいだけの話だ。何、俺たちに責任転嫁してんだ」
「うっ……。で、ですが！」
「言い訳するんじゃねぇよ。こんな状況を作り出している時点でお前の管理不足なんだよ。だいたい、1度でも後方確認していれば、すぐに気づけたものをだな。お前の自慢のその耳は飾りか？」
「うぅっ……ｏｒｚ」
　輝夜の正論と毒舌に言い負かされた黒ウサギは完全に四つん這いの状態になった。しかし、これは仕方ない。十六夜は割と早い段階で別行動を取ったのだ。浮かれていたのか、これにずっと気がつかなかった黒ウサギに完全に非がある。本来なら引率としての役目を果たさなければいけないのにも関わらずだ。
　そんな黒ウサギとは対照的に、ジンは顔色が蒼白になっていき慌て出す。
「た、大変です！〝世界の果て〟にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が！」
「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」
「ゲーム参加前にゲームオーバー……斬新？」
「冗談を言っている場合じゃありません！」
　ジンは必死に事の重大さを訴えていたが、輝夜たちは正直どうでもいいので聞き流していた。
　すると、さっきまで落ち込んでいた黒ウサギが溜息を吐きつつも立ち上がった。
「はぁ……ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御3人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」
「わかった。黒ウサギはどうする？」
「問題児を捕まえに参ります。事のついでに――――〝箱庭の貴族〟と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」
　凹みから立ち上がった黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出さ

せ、艶のある青い髪が淡い緋色に染まっていった。すると、外門めがけて空中高く跳び上がり、外門の脇にあった彫像を次々と駆け上がり、外門の柱に水平に張り付いた。
「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能ございませ！」
そう言うと黒ウサギは、淡い緋色の髪を靡かせ踏みしめた門柱に亀裂が入り、そして、そのまま弾丸のような跳躍した黒ウサギはあっという間に輝夜たちの視界から消え去っていった。
跳躍により巻き上がった風から髪の毛を庇う様に押さえていた飛鳥がポツリと呟いた。
「……。箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」
（沢田綱吉たちのような人間のほうがもっと速く移動できるけどな）
「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思います」
飛鳥の言葉に輝夜はツナたちのことを思い出しながら、そんなことを考えていた。そんな輝夜を他所にジンが『箱庭のウサギ』について説明していた。
「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださるのかしら？」
「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします。３人の名前は？」
ジンが自己紹介すると輝夜たちに名前を尋ねた。
「久遠飛鳥よ。後、全体的に黒い格好している男性とそこで猫を抱えているのが」
「春日部耀」
「光城輝夜だ」
そして、自己紹介を終えると、輝夜たち４人と１匹は箱庭の中に

入っていった。

箱庭二一〇五三八〇外門・内壁

輝夜たちが箱庭の中に入ると、そこには外からでは天幕で見えなかった壮大な町が広がっていた。しかも、天幕の内側からは太陽が見えていたのだ。そして、ちょうど、ジンがそのことについて、説明をしていた。

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可能になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

ジンの説明に飛鳥がピクリと反応した。

「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますけど」

「……。そう」

ジンの言葉に飛鳥は複雑そうな表情をしていた。彼女からすれば実在する吸血鬼の生態は知らないが、同じ街に住むことができる種とは思えなかった。

（吸血鬼か……。黒ウサギ（あのウサギ）といい、この世界にはベネスタンテ星にも地球にも見かけなかった生物が山程いるみたいだな）

一方で輝夜は、周りを観察して、自分の故郷の星と召喚される前にいた星との違いを比較していた。そうこうしているうちに、一同は〝六本傷〟の旗を掲げるカフェテラスに入った。各々席に座ると注文を取るために店の奥から素早く猫耳少女の店員が飛び出てきた。

「いらっしゃいませー。御注文はどうしますか？」

「えーと、紅茶を２つとを緑茶を１つ。あと軽食にコレとコレと」

「にゃーにゃにゃー」

「はいはーい。ティーセット３つに、ネコマンマですね」

……ん？　と飛鳥とジンが不可解そうに首を傾げるが、それ以上

に耀が驚いていた。
「三毛猫の言葉、分かるの？」
「そりゃ分かりますよー、私は猫族なんですから。お歳のわりに随分と綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちょっぴりサービスさせてもらいますよー」
「にゃにゃーにゃーにゃー」
「やだもーお客さんったらお上手なんだから♪」
　そう言うと猫耳店員は鉤尻尾をフリフリと揺らしながら店内に戻って行った。
「……箱庭ってすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」
「ニャオー」
「ちょ、ちょっと待って。貴女もしかして猫と会話ができるの？」
　動揺した飛鳥の問いに、耀が頷いて返した。飛鳥の隣にいるジンも興味深そうに質問を続けた。
「もしかして猫以外にも意思疎通は可能ですか？」
「雀、鶯、霍公鳥、水族館でペンギンと話したこともある「「ペンギン!?」」う、うん、ほかにもイルカ達と友達」
（……そう言えば、リボーンは虫と会話できるって、話を聞いたな。俺も長年、一緒のドレイクの言うことはわかるがそれ以外の動物は無理だな）
　耀の説明に飛鳥とジンは驚き、輝夜ですら感心していた。
「し、しかし全ての種と会話が可能なら心強いギフトですね。この箱庭において幻獣との言語の壁というのはとても大きいですから」
「そうなんだ」
「はい。一部の猫族やウサギのように神仏の眷属として言語中枢を与えられていれば意思疎通は可能ですけど、幻獣達はそれそのものが独立した種の一つです。同一種か相応のギフトがなければ意思疎通は難しいというのが一般です。箱庭の創始者の眷属に当たる黒ウサギでも、全ての種とコミュニケーションをとることはできないはずですし」

ジンの言葉に飛鳥が羨ましそうに呟いた。
「春日部さんは素敵な力があるのね……」
「久遠さんは……」
「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」
「うん、よろしく。それで飛鳥はどんな力を持っているの？」
「私？私の力は……まあ、酷いものよ。だって――――」
「おんやぁ？誰かと思えば東区部ぼ最底辺コミュ〝名無しの権兵衛〟のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないのですか？」
飛鳥が何かを言おうとしたら、２ｍを超える巨体に似合っていないピチピチのタキシードを着た男が割って入ってきて、空いていた椅子に座った。
（……タイムオーバーだな）
そんな男の介入を見て、輝夜はお冷やを飲みながら、そう考えていた。

ノーネーム

飛鳥たちが話している中、ピチピチのタキシードを着た男が割り込んできた。

「僕らのコミュニティは〝ノーネーム〟です。〝フォレス・ガロ〟のガルド＝ガスパー」

ジンは男、ガルドにそう言った。

「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなどできたものだ――――そう思わないかい、紳士方にお嬢様方」

そう言って、輝夜たちに愛想笑いを向けるガルドだったが、飛鳥と耀は冷ややかな態度で返した。（輝夜は興味なさそうな態度だった）

「失礼ですけど、同席を求めるならばまず氏名を名乗ったのちに一言添えるのが礼儀ではないかしら？」

「ついでに俺たちが喫茶店に入ってから遠くからじろじろと視ていたのも不愉快だな」

輝夜の何でもなさそうに言った言葉にその場にいた全員が驚いていた。特に、ガルドは驚愕の表情をしていた。輝夜からすれば、あの程度でわからないのはおかしかった。黒ウサギはあれでも隠れようとしていた。しかし、ガルドは人混みにいれば問題ないだろうという考えから隠れようともしていなかったのだ。輝夜にとってはそんな状況でじろじろと見られたら、黒ウサギよりもわかりやすかったのだ。

「っ!?それは大変失礼しました。この名無しが連れてきた御方達がどのような人物なのか気になって遠目から伺わせてもらいました。不快と思われていたなら謝罪させてもらいます。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ〝六百六十六の獣〟の傘下であるーーー「烏合の衆の」ーーーコミュニティのリーダーをしている、ってマテやゴラァ!!誰が烏合の衆だ小僧オォ!!」

ジンの横槍を入れた挑発にガルドは怒鳴り声を上げながら激変していった。口が耳元まで大きく裂け、肉食獣のような牙とギョロリと剥かれた瞳が激しい怒りとともにジンに向けられた。
「口慎めや小僧ォ……紳士で通っている俺にも聞き逃せねえ言葉はあるんだぜ……？」
「森の守護者だったころの貴方なら相応に礼儀で返していたでしょうが、今の貴女はこの二一〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」
「ハッ、そういう貴様は過去の栄華に縋る亡霊と変わらんだろうがッ。自分のコミュニティがどういう状況に置かれてんのか理解できてんのかい？」
「ハイ、ちょっとストップ」
険悪な雰囲気で言い争っていた2人に飛鳥が待ったをかけた。
「事情はよくわからないけど、貴方達二人の仲が悪いことは承知したわ。それを踏まえたうえで質問したいのだけど――」
そう言って飛鳥はジンを鋭く睨んだ。
「ねえ、ジン君。ガルドさんが指摘している、私達のコミュニティが置かれている状況……というものを説明していただける？」
「そ、それは……！」
飛鳥の言葉にジンが動揺した。それを見て、飛鳥が一気に畳み掛けた。
「貴方は自分のことをコミュニティのリーダーと名乗ったわ。なら黒ウサギと同様に、新たな同士として呼びだした私達にコミュニティとはどういうものなのかを説明する義務があるはずよ。違うかしら？」
「……」
飛鳥に責め立てられたジンだが、それでもジンは答えようとしなかった。それを見て、ガルドは獣の顔から先程の顔に戻して、含みのある笑顔と上品ぶった声音で言った。
「レディ、貴女の言う通りだ。コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教えるのは当然の義務。しかし彼をそれをしたがらないでしょう。よろしければ、〝フォレス・ガロ〟のリーダー

である私が、コミュニティの重要性と小僧――――ではなく、ジン＝ラッセル率いる〝ノーネーム〟のコミュニティを客観的に説明させていただきますが……？」
「……そうね。お願いするわ」
ガルドの提案に飛鳥が了承した。
「承りました。まず、コミュニティとは読んで字のごとく複数名で作られる組織の総称です。受け取り方は種によって違うでしょう。人間はその大小で家族とも組織とも国ともコミュニティを言い換えますし、幻獣は〝群れ〟とも言い換えられる」
「それぐらいわかるわ」
「はい、確認までに。そしてコミュニティは活動する上で箱庭に〝名〟と〝旗印〟を申告しなければなりません。特に旗印はコミュニティの縄張りを主張する大事な物。この店にも大きな旗印が掲げられているでしょう？あれがそうです」
ガルドはそう言いながら、カフェテラスの店頭に掲げられている〝六本傷〟が描かれた旗を指さす。
「六本の傷が入ったあの旗印は、この店を経営するコミュニティの縄張りであることを示しています。もし自分のコミュニティを大きくしたいと望むのであれば、あの旗印のコミュニティに両者合意で『ギフトゲーム』を仕掛ければいいのです。私のコミュニティは実際にそうやって大きくしましたから」
そう言って、ガルドは自慢げに胸に刻まれた虎の紋様をモチーフにした刺繍を指さした。輝夜たちがこの店に来るまでそのマークがいろんなところに飾られていた。飛鳥もそれに気がついたのか、ガルドに尋ねた。
「その紋様が縄張りを示すというのなら……この近辺はほぼ貴方達のコミュニティが支配していると考えていいかしら？」
「ええ。残念なことにこの店のコミュニティは南区画に本拠があるため手出しできませんが。この二一〇五三八〇外門付近で活動可能な中流コミュニティは全て私の支配下です。残すは本拠が他区か上層にあるコミュニティと――――奪うに値しない名も無きコミュニティ

ぐらいです」
　嫌味を込めてガルドはそう言った。それを聞いて、ジンは悔しそうに顔を俯かせた。
「さて、ここからがレディ達のコミュニティの問題。実は貴女達の所属するコミュニティはーーー」
「大方、何かしらの理由で衰退した弱小コミュニティだろ」
　そこで、ガルドが店に入ったときからずっと黙っていた輝夜が何でもなさそうに口を挟んだ。
　そして、輝夜の言葉にまた一同、驚いていた。だが、先程とは違い、ガルドは感心した顔をして、ジンは顔面蒼白していた。
「先程の私の観察を見破ったことといい、あなたは優れた観察眼を持っていますね。あなたはきっと、ギフトゲームで優れたプレイヤーになるでしょうね」
「世辞はいらない。それよりも話を続けてくれないか」
「ちょ、ちょっと、待ちなさい！」
　輝夜はガルドに話を即したが、飛鳥が割り込んできた。
「あなた！いつ、ジン君のコミュニティの状況に気付いていたの!?」
「……」コクコク
　飛鳥の言葉に耀も頷いていた。
「私も少々気になります。良ければ御説明をお願いしたいのですが？」
「……ハァ」
　輝夜はめんどくさそうにため息をつきながら、説明した。
「気づいていた理由はいろいろありすぎるんだが、まず、黒ウサギと初めて会ったときとギフトゲームのとき、あいつはおどけた態度を取りながらも、俺たちを値踏みするような視線を送っていたこと。それと、俺と逆廻、この場にいないもう1人がコミュニティに入ることを拒否したときにあいつが憤慨したこと。このことから戦力補充のために呼び出されたのがわかる」
「……でも、それだけじゃ、黒ウサギのコミュニティが弱体化していることわからない」

そこで、耀が疑問を浮かべて、そう言った。
「まぁ、確かにあの時点では、俺も予想でしかなかったな。だが、黒ウサギもジンも今の今まで説明すべき、自分たちのコミュニティの状況を説明していない。これだけでも、十分に後ろめたいことを隠していることがわかる」
「ッ！」
「確かにそうね。ガルドさんが来てやっと、説明し始めたわね」
「その説明も余所者のガルドがやっているがな。それとそのガルドがこの店に入ったときに言っていた『過去の栄華に縋る亡霊』や『名無し』、ジンの言っていた『ノーネーム』。これから、昔は立派なコミュニティだったみたいだが、何かしらの理由で今では〝名〟を失って弱体化したって、考えられる」
「……うん。それだと、辻褄が合う」
「あと、大きな理由としては、ジンがリーダーをしているってことだな」
「っ!!僕ですか!?」
いきなり、輝夜に自分がばれた一因だと言われて、ジンは驚いた。しかも、自分がリーダーをしていることがおかしいみたいな言い方をされて、ジンは思わず立ち上がって、叫んだ。しかし、それに対して、輝夜はどこまでも冷静な態度で返した。
「客観的に見て、１０歳位のガキが一組織のリーダーをしているのはおかしいだろ。普通はその年のガキをリーダーにしない。そんなことしたら、周りから嘗められるのがオチだからな。まぁ、(ベルゼブブのような)リーダーになって当然な大きな力を持っていたり、(沢田綱吉のボンゴレのような)そのコミュニティのリーダーは血縁関係でしかなれないとかなら、話は別だがお前にはそう言った理由は無さそうだ。はっきり言って、黒ウサギがリーダーしたほうが、まだ、見栄えがあった。仮に黒ウサギが何かしらの理由でリーダーになれないからジンに白羽の矢が立ったなら、さっき、言った理由も踏まえて、相当切羽詰まっているって、考えるべきだろうな」
そう言って、輝夜はもう話し終えたと言わんばかりにお冷やを口に

つけて、黙ってしまった。そして、周りは静寂に包まれたが、ガルドの拍手によりそれはすぐに破られた。
「いやはや、これだけの情報でここまで当てられるとは私、感服しました。貴方の推測は全て事実であります。〝ノーネーム〟とは〝名〟が無いその他大勢のことを指します。ギフトゲームに敗れたジンのコミュニティは〝名〟と〝旗印〟に続いて、中核を成す仲間達は一人も残っていないんですよ。今、残っているメンバーはジンと黒ウサギ以外は１０歳以下の子供達ばかりで、もう崩壊寸前のコミュニティなんです。……しかし、貴方達の所属するコミュニティは――――数年前まで、この東区画最大手のコミュニティでした」
「へぇ、それは意外ね」
「勿論当時のリーダーはジン君ではありませんでしたけどね。比べ物にもならい優秀な男だったそうな」
　つまらなさそうにガルドはそう言った。余所のコミュニティの栄光に興味ないのだろう。しかし、次の瞬間、彼の顔は愉悦なものへと変わった。
「しかし！……彼らは敵に回してはいけないモノに目を付けられた。そして彼らはギフトゲームに参加させられ、たった一夜で滅ぼされた。『ギフトゲーム』が支配するこの箱庭の世界、最悪の天災によって」
「「天災？」」
「……」
　ガルドの言葉に飛鳥と耀が聞き返した。そして、輝夜は黙って聞いていた。
「此れは比喩にあらず、ですよレディ達。彼らは箱庭で唯一最大にして最悪の天災――――俗に
　〝魔王〟と呼ばれる者達です」
「魔王……ね。それはまた大層な名だこと」
「魔王は〝主催者権限（ホストマスター）〟という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼らにギフトゲームを挑まれたら最後、誰も断ることができない。ジンのコミュニティは〝主催者権限〟を持つ魔王のゲームに強制参

加させられ、コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまったのですよ」
「なるほどね。大体理解したわ。つまり〝魔王〟というのはこの世界で特権階級を振り回す神様のことを指して、ジン君のコミュニティは彼らの玩具として潰された。そういうことね？」
「そうです、レディ。神仏というのは古来、生意気な人間が大好きですから。愛しすぎた挙句に使い物にならなくなることはよくあることなんですよ」
（……確かに、ロヴィーノはそう言う奴だったな）
　輝夜は元の世界の邪神のことを思い出して、内心うんざりしていた。そして、そんな輝夜の心情とは余所でガルドはカフェテラスの椅子の上で大きく手を広げて皮肉そうに笑いながら言った。
「名も、旗も、主力陣の全てを失った時、もしも新たなコミュニティを結成していたなら、前コミュニティは有終の美を飾っていたんでしょうがね。今や名誉も誇りも失墜した名もなきコミュニティの一つでしかありません」
「……」
「名もなき組織など信用されませんし、優秀な人材が、名誉も誇りも失墜させたコミュニティに集まるでしょうか？」
「そうね。誰も加入したいとは思わないでしょうね」
「その通り。彼は出来もしない夢を掲げて過去の栄華に縋る恥知らずな亡霊でしかないのですよ」
　品のない、豪快な笑顔でジンとコミュニティを笑うガルド。それに対して、ジンは顔を真っ赤にして両手を膝の上で握りしめていた。
「もっと、言えばですね。彼はコミュニティのリーダーとは名ばかりで殆どリーダーとして活動はしていません。コミュニティの再建を掲げていますが、その実態は黒ウサギにコミュニティを支えてもらうだけの寄生虫」
「……っ」
「私は黒ウサギが不憫でなりません。ウサギと言えば〝箱庭の貴族〟と呼ばれるほど強力なギフトの数々を持ち、何処のコミュニティでも

破格の待遇で愛でられるはず。コミュニティにとってウサギを所有しているのはそれだけで大きな〝箔〟が付く」
「……そう。事情はわかったわ。それでガルドさんは、どうして私達にそんな話を丁寧に話してくれるのかしら？」
　飛鳥は含みのある声でガルドに尋ねた。その含みを察してガルドは笑いを浮かべていった。
「単刀直入に言います。もしよろしければ、黒ウサギ共々、私のコミュニティに入りませんか？」
「な、なにを言い出すんですガルド＝ガスパー!?」
「黙れや、ジン＝ラッセル」
　怒りのあまりテーブルを叩いたジンを、ガルドは獰猛な瞳で睨み返す。
「そもそもテメェが名と旗印を新しく改めていれば最低限の人材は残っていたはずだろうが。それを貴様の我が儘で追い込んでおきながら、どの顔で異世界から人材を呼び出した」
「そ、それは……」
「何も知らない相手なら騙しとおせるとでも思ったのか？その結果黒ウサギと同じ苦労を背負わせるってんなら……こっちも箱庭の住人として通さなきゃならねえ仁義があるぜ」
　ガルドの言葉にジンが僅かに怯んだ。その様子を見てガルドは鼻を鳴らすと、愛想笑いを浮かべて、輝夜たちに向いた。
「……で、どうですか？返事はすぐにとは言いません。コミュニティに属さずとも貴方達には箱庭で三十日の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出したコミュニティと私達〝フォレス・ガロ〟のコミュニティを視察し、十分に検討してから――」
「結構よ。だってジン君のコミュニティで私は間に合っているもの」
「は？」
　ガルドの言葉を飛鳥が遮った。それに対して、断られたガルド、俯いていたジンは思わず声を上げてしまった。
　誘いをばっさりと切り捨てられ、ガルドもジンも飛鳥の顔を伺ったが飛鳥は何事もなかったように紅茶を飲み干すと、耀に笑顔で話しか

ける。
「春日部さんは今の話をどう思う？」
「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りにきただけだもの」
「あら意外。じゃあ私が友達1号に立候補していいかしら？私達って正反対だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」
　飛鳥は自分の髪を触りながら耀に尋ねた。口にしておきながら恥ずかしかったのだろう。
「うん。飛鳥は今までの人たちと違う気がする」
　それに対して、耀はクスッと笑いながら、小さく頷いた。そんな耀の態度に恥ずかしく感じたのか、輝夜に話を振った。
「それで光城さんは？」
「俺か？俺は……」
　輝夜はそこで1度、区切って静かにだけどはっきりと言った。

「黒ウサギとジン＝ラッセルのコミュニティに入る気は無いな」
　明確な拒絶の言葉を。